

今こそ、わさビームを放て

diol

「食らえ、わさビーム、ビビビビビー！」

「ぐわああ...！何故だ、スッシーマン...！」

「必ず最後に愛は勝つ、って誰かも歌ってただろう。その通りなのだよ、怪人ハンバーガー！」

「...あれ、昨日の、ハンバーグじゃなかった？」

「あ、そうだった。アハハハハ！」

今から十年前の、僕の愛すべき母校、北川小学校三年三組の教室での、親友佐々木卓也との愛すべき「スッシーマンごっこ」だ。

当時僕は、「愛を握れ スッシーマン」という特撮番組を毎週欠かさず観ていた。主人公の名前は鮎田太郎、普段は寿司屋「愛」で住み込みで板前の修行をしているが、これがまたドジばかりする青年なのだ。何かと主人に怒鳴られてばかりいる。しかし、悪の組織「ウェスタン・デイナー」が送り込んだ怪人が暴れているのをテレビのニュースで見ると、鮎田家秘伝の「イカスライダー」という、寿司ネタのイカの形の空飛ぶ絨毯を、「愛」の二階にある自分の部屋の押し入れから出して乗り、窓から飛び立つのだ。

そして、鮎田青年は、胸に「S」の字が入ったコスチュームを着たスッシーマンとして、怪人の前に降り立つのである。この時ほど僕の胸の躍る瞬間はない。スッシーマンは番組の初期は結構楽に怪人達を倒していたが、後になるにつれ苦戦するようになった。しかし最後には、必ず必殺技「わさビーム」を放って怪人を撃破するのだ。

そして周囲に気付かれぬよう寿司屋「愛」に戻ってくると、主人はスッシーマンと怪人の戦闘をテレビのニュースで観ていて、「今日もスッシーマンのおかげで世の平和は保たれた。お前もハマばかりせんで、たまには彼みたいに立派にやってみろ」「はあい」というようなやり取りをして終わる。格好いい、という他に表現が見付からない。

僕は、スッシーマンに大熱中し、それ以外の何物にも興味を持たなかった。スッシーマンフィギュアは怪人含め全種類コンプリート、スッシーマンシールも同じく、スッシーマン変身コスチュームも二着持っていて、毎日学校から帰るとそれを着て公園に繰り出し、上手くいけば、友達と夕方までスッシーマンごっこをした。しかし、大概是

「飽きたよお、違うことしよ」

と途中で言われ、渋々違う遊びに移った。僕としては、「飽き」などというものは、スッシーマンに関しては存在しないものだった。できれば学校にもコスチュームを着て行きたかったが親に止められたので、普段着（といっても普段からスッシーマンコスチュームを着ているが）で、ごっこをやった。

夜寝る時も、スッシーマンや、ヒロインのウニ子や、怪人達がプリントされたスッシーマンパジャマを着て、キャラクター達に包まれて眠りについた。見る夢もほとんどスッシーマンの世界のものだった。そこでは、自分がスッシーマンになったり、あるいはスッシーマンに助けられたりした。そんな夢を見た翌朝は、温かい幸せの雲に包まれている気分だった。

四年一組に上がった年の夏休み直前、突如、僕を胸躍らせたスッシーマンは、最終回を迎えた。その朝、いつものように新聞のテレビ欄を見て、箸でつまんでいたソーセージを落とした。夜七時の「スッシーマン」の右横の、(終)マーク。目を擦り、もう一度見た。やはり(終)マークは、そこに凶々しく居座っている。

「こら昇平、ソーセージ落として...、あれ？」

僕は無言の涙を流していた。

最終回で放ったスッシーマン、いや、鮎田青年の言葉は、今でも鼓膜に張り付いている。意外なことに、スッシーマンではなく、本来の鮎田青年として、最後子供達に語りかけたのだ。それが印象に残っている原因の一つでもある。

「みんな、二年間応援ありがとう！君達のおかげで、悪の組織『ウェスタン・ディナー』を滅ぼすことができた。感謝してる。

僕はこれからはスッシーマンになる必要はない。今のところはね。だから、みんなも知ってるように、この姿ではドジな僕だけど、何とか頑張って、立派な板前になってみせる。みんなはもうその時は大人かも知れないけど、できれば、僕の寿司を食べにきてくれ。

また君達の周りに怪人が現れれば、僕はすぐにスッシーマンになって駆け付ける。約束するよ。じゃあ！」

ちなみに、キャストを総入れ替えした「スッシーマン2」がその後番組だったが、こちらには全く魅力を感じなかった。外見だけは金ぴかの、中身のない筒のような物語だった。主人公から人間臭さが奪われていた。これっぽっちも格好よくなかった。

番組が終わったのは悲しかったが、僕の中のスッシーマンは終わっていなかった。僕の心の中のスッシーマンは、以前と変わらぬ輝きを放っていた。番組は終わっても、スッシーマンフィギュアにうっとりし、友達とスッシーマンごっこをした。

ところが、五年生に上がった直後、友達の一人が奇妙なことを言ってきた。

いつものようにスッシーマンごっこに誘うと、彼はこう言ったのだ。

「ダサ」

僕にとって、スッシーマンがダサいというのは、「明るい暗闇」という表現と同じくらい意味不明だった。スッシーマンは、世の中の平和を乱す怪人達を倒す、愛に生きる男だ。そのどこがダサいのか。「ダサい」というのは、キノコ頭を振って「フー」なんて歌うのを言うのだ。

「おい、スッシーマンのどこがダサいんだ」

「...フン、やってりゃいいじゃん、勝手に」

その時は彼を変った奴だと思ったが、おかしなことに、段々とそういうことを言う奴は増えていって、気が付くとスッシーマンごっこはできなくなっていた。

スッシーマン変身コスチュームも小さくなって着られなかったので買い替えたかったが、僕の体のサイズのものではなかったし、第一番組が終わっているのも初代スッシーマンの変身コスチューム自体がもう売っていなかった。

極めつけは、親友の卓也を家に呼んだ時である。彼は、いつものように僕の部屋で寛いでいたのだが、棚の上に並べてあるスッシーマンフィギュアやスッシーマンシールを一瞥して言った。

「俺だからいいけど、他の奴らが見たら笑うぜ。こういうのしまった方がいいよ」

僕は最初「こういうの」が何を指すのか分からなかったが、フィギュアやシールを顎で指したので、ショックを受けた。正直、親友に裏切られたような気がした。

「おい、何でだよ、お前まで...」

「まあ、俺はいいけど。好きだよ、スッシーマン。だけど、流行ってというのはあるからね。もうはやってないよ、スッシーマンは」

笑われても構わない。スッシーマングッズをいつも眺めていたかったので、助言に従わず、棚の上に出したままにした。しかし、親友にそう言われたことで、深く、深く傷付いた。

僕の青春は、終わった。

それ以来、友達と以前と変わらないように付き合っているように見せてはいたが、何か一枚薄い壁のようなものを感じるのであった。自分の、スッシーマンが好きだという感情を示せないことに由来する壁だ。どうせ言っても、馬鹿にされ、僕の熱い思いに、とびきり冷えた氷水を注がれておしまいなのだ。

中学校では水泳部に入ったが、ある日、部室に入ると、予期せぬ素晴らしい光景があった。なんと、同級生達が、懐かしき「スッシーマンごっこ」をしているのである。思わず、何も言わずその輪の中に入ったのでびっくりされたが、すぐにそこに参加できた。

しかし、やっていて何か違和感がある。やりながらそれを考えていると、皆が物語の世界に入り込んでやっていないのだと気付いた。何か外からの目線でやっていて、彼等は物語の一員とはなっていないのである。それでも楽しくスッシーマンごっこをしていると、

「お前、真剣すぎ...」

と言われた。

高校でも水泳部に入り、水泳に打ち込んだ。また、人並みに音楽を聴いたりしたし、漫画雑誌も読んだ。そういうものにも興味を持つよう努力し、スッシーマンを失ったことで心に空いた穴を埋めようとした。しかし、スッシーマンほど衝撃的で、僕を引き付けるものは、どうしてもそれらには見出だせなかった。

そして人との壁を感じたまま日々を過ごし、とうとう先月大学に入ってしまった。一見、順風満帆な人生。だが、どこか心にブレーキがかかったままなのだ。もしスッシーマン好きを周りに公言しても、今ならば「ダサイ」などと言われず、静かに語り合えるだろう。しかし、静かに語り合っては駄目なのだ。スッシーマン変身コスチュームを着て公園に繰り出し、夕方までスッシーマンごっこをせねば。正直、全くそこに「恥ずかしい」なんて感情はない。羞恥心はない。それを見る人はどう思うか知らないが。警察に通報されてもいいから近所の子供達とスッシーマンごっこができないかと考えたが、今時の子供はスッシーマンを知らない。そう、もうはやってはいないのだ。

いくらスッシーマンを語り尽くしても、僕の心にブレーキはかかったままなのだ。

「ただいまあ」

僕が台所で皿洗いをし、母が居間でソファーに座りテレビドラマを観ていると、父が帰ってきた。父はへべれけに酔っていた。

「鱧にキスだぜ、ヒック...」

顔を真っ赤にした父が、鞆を床にほおりなげて、ソファーの母の隣に腰掛けた。

「まあ、酒臭い。どうしたのよ」

「いやあね、門倉達と、ちょっとお高い、回らない寿司屋に行った訳よ。そしたらね、メニュー見て『鱧』って。こりゃ千載一遇のチャンスとあちきは考えてね。早速頼んで、出てきた鱧ちゃんに、キスよ。もう大笑い...」

「そうじゃなくて、どうしてこんな酔ってるのよ？」

「ん、そりゃ、先にいつものところで一杯やって...」

「こんなになるまで飲んで！しかも、お寿司屋さんでそんなみっともないこと！並田家の恥だわ...」

「いいじゃねえか、お前んとこじゃねえんだから」

「私ももう並田家の一員なの、残念ながらね！」

「ひい...」

しばらくして落ち着いてから、僕はさっき母がいた位置に座った。母は今は風呂に入っている。こんな状態であるからこそ、父に聞けることもある。

「ねえ、父さん」

「なんだ、サン」

「やめてよ。ねえ父さん。人って、どうして変わっちゃうんだろう」

「...何だ、やけに真面目腐ったこと言うじゃねえか。さては、ハニーに振られたか」

「違うよ。そもそもいないし。何となくだよ。周りを見ててね。前まで好きだったものが、嫌いになってくんだよ。いや、嫌いは言い過ぎだな。その、関心がなくなってくんだ。もちろん逆もあるけど。そういう変化が、何と言うか、いちいち僕に納得のできないものなんだ。いい風が変わってるとは、僕にはどうしても思えない。思いたくてもね。昔はみんなは僕と同じだったけど、今ではかけ離れている。なぜなら、僕は昔と変わらず、みんなは昔と違うからだ。だけど、変わるより変わらない方が、遥かに自然だろ？変わるのには何かしなくちゃいけないけど、変わらないのには何もしなくていい。そりゃ体は成長してくけど、そうじゃなきゃ困る、けど昔の僕は、こんなにも心まで変わっていくとは思ってなかった。みんなはどうか知らないけどね。いつまでもヒーローごっこできると信じてた。そして今も、僕の気持ちは同じだ。僕に関しては予想通りだった。だけど...」

ねえ父さん、なんで人って変わるんだろう。中学上がったときにね、急にみんな年上にはですますで話し始めて、変だって思った。去年まで年上とも同級生と同じように口きいてたのに、パッと切り替えて。だったらなんで先生達は最初からそう教えなかったのか。なんでわざわざ変えるのか、変わるのか。前と違うことを言うのか。

動物は、子供も大人も、あんまり変わらないだろう？犬は犬だし、猫は猫。子供も大人も、

餌食って、じゃれて、寝るだろう。だけど人間は、子供と大人で全く考えてることもやることも違う。子供は大人みたいに敬語遣わないし、大人は子供みたいにヒーローごっこはしない。なんで？ 進化の過程でそうなったのか？ 人間は子供と大人で違うことをするよう進化したのか？ それは何か意味があるのか？ 不自然じゃないか？ ねえ、なんで？」

父は僕の話聞き終わると、深く息を吸って、吐いた。そして、おもむろに口を開いた。

「ヒック…。お前も、成長したなあ」

「俺が、成長した…？」

「ああ。立派に成長した。んん、思うんだけどね、お前はちと考え過ぎだな、ヒック…。」

「考え過ぎ？」

「そう。みんな、お前ほど一生懸命考えずに、何となく過ごしてると思うんだ。言ってみりゃ、流れに身を任せてるんだ。すると、行く川の流れは絶えずして、しかも元の水にあらずで、どんどん変わっていく。お前は、それだけ考えることで、流れの中で踏ん張ってると思うんだな」

「じゃあ、俺が変なのか」

「まあそれは確かに普通ではないけど、周りとは違うけれど、別に俺は構わないと思う。流れの中で踏ん張って頑固に生きるのも乙だ。俺は嫌いじゃない。ただ、周りとは違うことは受け入れざるを得んだらうな。自分の生き方を人に押し

付けることは、誰にもできん。ま、要するに、肩の力を抜けてことだ。分かった？ あ、母さんが上がったから、酔い醒ましに、先入らせてもらうぞ、ヒック…」

父はソファから立ち上がり、千鳥足で風呂場に向かった。僕は、そんな父の背中を、ぼんやりと見つめていた。

翌日、僕は大学に向かうバスの中で、昨晚の父の言葉を思い返していた。ちなみに、朝食のテーブルで父に「昨日俺に話したこと、覚えてる？」と聞いたが、

「いや、昨日のことは、鱧にキスして以降は全く覚えがないんだな、これが。あいたたた…。頭痛の薬飲まなきゃ。ん、なんかお前に言ったか？」

と言っていたので、ホッとした。万一記憶が残っていたら、「悩み事があるなら、打ち明けてみなさい」なんて改めて言われかねないからだ。

周りとは違うことは、受け入れざるを得ない。しかし、その違いがあまりにも大きすぎるのだ。表面的な違いではない。もっと、根本的なところで食い違ってしまっている。そう、スッシーマンとは、僕の根本、根っこなのだ。僕という存在は、その上に立っているひ弱な木に過ぎない。根がなくなれば、そんな木は風に吹き飛ばされるか、枯れるしかない。スッシーマンを失った僕は、今、枯れようとしている。

僕はバスの一番後ろの横長の席の向かって左隅に座っていて、隣に二人女性が座っていたのだが、僕と同じ大学の学生らしかった。そういうのは、雰囲気ですぐに分かるものなのだ。

「ねえ、昨日の『ミュージック・タイム』観た？」

「観た観た。ヒロ君、また新曲出したんだねえ。観てて私がキャーキャー言うもんだから、母

さんが『静かにテレビ観れないんだったら、テレビと一緒にあんた粗大ごみに出すよ』だって。訳分かんない」

「ヒロ君観てキャーキャーなるのは、女子の特権だわ。おばさんにはこの心のときめきが分からないのよ。ああ、一度でいいから、ヒロ君に抱かれてみたいわあ。『ハニー、君をお寿司のように、おいしくおいしく握ってあげるよ』なんて囁かれて。憧れちゃうわあ」

「訳分かんない」

もしこの人達からその「ヒロ君」なるものを奪ったら、一体どうなってしまうのだろうか？ 僕みたいに、枯れてしまうだろうか？ いや、きっとそうはなるまい。何故なら、この人たちの言う「憧れ」なんて、たかが知れたものだからだ。無いなら無いで、おそらく何の支障もなく生きていけるだろう。しかし、僕のスッシーマンに対する「憧れ」は、全くそれとは次元の違うものだ。スッシーマンは根っこなのだ。それは僕という本体へ、生きるのに必要不可欠な栄養を送ってくれる、そういういわば「器官」であったのだ。僕の、切っても切り離せない一部だったのだ。

大学で、上の空でか細い声のおじいちゃん教授の化学の講義を聴いていると、ポケットの携帯電話が震えた。机で隠しながらそっと取り出して見ると、「Mail 佐々木卓也」と画面に出ていた。卓也からのメールは久々だ。かれこれ、彼とはもう三週間くらい連絡を取っていない気がする。すぐに本文を開いた。

「最近どう」

彼らしい、単刀直入な文面。彼は節約家なので、できるだけメールの文章は切り詰める。長い内容を伝えたいのなら、電話で直接伝えて、料金を抑える。そういう性格なのだ。

教授に気付かれぬよう、といっても目も耳もかなり悪いから大丈夫だろうが、そっと返事を打った。

「寿司が食いたい」

腰の曲がったおじいちゃん教授は、か細い声を振り絞り、原爆について語っていた。

「君達、わしはこれから老骨に鞭打って君達に原子のことを云々してくわけだけれども、はあはあ、たとえこれから万一君達が悪の組織なんかに加わってしまってもだね、ふうふう、原爆だけは手を出しちゃだめだよ。わしの知り合いで、広島で被爆して死んだ奴がおる。いい奴じゃったが、原爆に善人も悪人もないんだね、いい奴も悪い奴も皆殺しじゃ。わしが化学の世界に進んだのも、それがあったからじゃ。絶対にこんな悪魔の兵器を世に生み出してはいけない。それが直接いろんなところに訴えられるのが科学者だとわしは考えたわけじゃ。だから君達、絶対に、断じて、原爆だけは駄目じゃ。誰が何と言おうと。それだけ君達に伝えたい。わしの講義する他のことなんかどうでもいい、これだけなんじゃ。これだけは自分の肝に銘じて、また外の世界に訴えてほしい。ノー・モア・ヒロシマじゃ...」

今までは上の空であったが、それだけはちゃんと聴いていた。か細い声の中に、芯の強さがあった。今までの講義ではなかったものだ。このおじいちゃん教授の言うことに、初めて従おうと思った。

そうこうしてうちに、卓也から返事が来た。

「お前んちに行く。5時」

余計なものを一切省いた、素晴らしい文章だ。

三時くらいに帰宅したが、何もすることがないので、自分の部屋のテレビで、やっていたドラマの再放送を観た。このドラマは、確か僕が小学生のとき、母親が毎週観ていたものだ。若くて美人な敏腕女社長の、栄光と苦悩を描いたドラマだ。苦悩とは、大概恋愛についてのもので、四角い画面の中で、一生懸命女社長とハンサムな男達が駆け引きをしていた。実におめでたい人達である。恋人とスッシーマン、比べられるようなものではないが、それを失った時の喪失感や絶望はどちらの方が大きいのだろうと考えてみる。答えは、火を見るよりも明らかだ。

僕は今、立派な板前になったであろう彼の握った寿司を、猛烈に食べたい。

壁の掛け時計を見ると、四時五十分。もうそろそろ卓也が来るだろうと待ち構えていたが、五時五分になってもインターフォンは鳴らない。おかしい。卓也は、自分にも人にも厳しい、時間厳守の男だ。今は亡き父に、時間については厳しくしつけられたのだと自慢げに語っていたのに。

卓也の父は、卓也が幼稚園児の時、仕事に行くといっただけのまま行方をくらませたらしい。その日出勤はしていなかったらしく、誘拐や家出の線で警察も暫く捜査したが、全く手掛かりが出てこないで、実質打ち切られてしまった。母も最初のうちは毎日父の顔写真がプリントされたビラを息子を同伴させ大きな駅で配っていたが、もう最近はとんとしなくなっただけだ。死んだものだと思って諦めたのだ。去る者日々に以て疎し、と卓也は遠くを見るような眼差しをして呟いていた。

ぼんやりとそんなことを考えていると、時刻は五時三十分を回った。何か別の用事でも入ったのかと思っていると、やっとインターフォンが鳴った。

「翔平、卓也君よお。出なさい」

「分かってるよ」

階段を降りつつ母とそんなやり取りをし、玄関のドアを開けると、汗まみれの卓也がいた。

「よお翔ちゃん、はあはあ...、お元気かい」

「ああ元気だ。どうしたんだい、汗かいて。何だいその袋は」

卓也は、手に白い布のかばんを提げていて、中には何か入っているらしかった。

「部屋に上がってからのお楽しみだ。とにかく、遅れてすまなかった。この通りだ」

卓也は、頭を軽く下げ、手を合わせた。

「いやいや、いいんだ、どうせ暇なんだ。しかし、お前にしっちゃ珍しいね、遅刻なんて」

「これを探し回ってたんだよ。だから汗まみれさ」

卓也は、かばんを持ち上げて、僕に示した。

「へえ。相当すごいものが入ってたね」

「まあね。とりあえず、あがらせて」

卓也は、変なところで図々しいのだ。催促されたので、僕等は僕の部屋へ上がった。

「へへへ、お前の為を思ってな、こんなものを拵えさせてもらった」

僕の母の出した茶を飲みつつ、彼は袋から中の物を取り出した。

それは、手のひらサイズの大きさの石ころ7つと、定規がもう少し幅が広くなったような木の



板だった。

「何なんだこれは。なんかの魔術の道具か」

「そんなわきゃあるか。名付けて、『スッシーマンのお墓セット』だ」

僕は目を丸くした。スッシーマンの墓だって？

「スッシーマンの墓？」

「そう。お前は、スッシーマンにこだわり過ぎだ。メールをしても話をしても、いつもいつもスッシーマン。スッシーマンごっこせんかなんて、するわきゃないだろう。今日のメールだって、スッシーマンのことなんだろう。棚の上のコレクションだっていまだにあんなにピカピカ。手入れが行き届き過ぎだ。全く、いつまで子供なんだ、お前は。」

いいよ別に、子供の頃好きだったものを今も追いつけてるなんて、よくある話さ。特に男にはな。だけど、お前の話を聞いてると、どうもそういうのとは別種の気がする。お前のは、凄まじくネガティブなんだ。お前は他の人と同じように一つの物を追っかけてるんだけど、お前は、それに追いつかないことを心の底から嘆いてる。いつも溜息ばっかなんだ。普通なら、それを浪漫とか夢とか言うんだけど、お前はそういう、いい風にとれないんだな。スッシーマンに追いつけないことを悲しんじゃってる。

ということで、俺が考え出したのが、いっそのことスッシーマンの墓を建てようじゃないか、ということ。そうでもしなきゃ、スッシーマンを断ち切れまいだろう？ 今のお前に必要なのは、生温かい過去を脱ぎ捨てて、前を向いて歩くことだ。そうだろう？ 自分でも何となくそれに気付いてんだらう？ だから、俺がその手伝いをば少しばかりしてやろうというわけだ。どうだ、やってみないか？」

僕はうつむいた。何もかも、卓也の言うことが正しい。そうだ、僕はいつまでも、スッシーマンという未練を抱えていてはだめなのだ。何となくではない、そんなこと、とっくの昔にはっきりとわかっている。しかし、しかしだ—。

僕は、顔を上げ、卓也の目を見た。

「なあ、その前に、一つ聞いていいか？ これさえ答えを聞かせてもらえれば、墓を建てるよ。」

「何？」

「人って、何で変わるんだらう？ 昔好きだったものに、どうして冷淡になるんだらう」

「んん。あのね、根本は変わってないんだ。変わってないんだよ。今も好きなんだよ。大好きさ。ただね、方法。それを愛する方法がね、変わるだけなんだ。分かるか？ お前は昔チャンバラごっこという方法でスッシーマンを愛していた。コスチュームを着るという方法で、スッシーマンを愛していた。だけどね、普通は大学生にもなると、もっと違う方法で一つの物を愛するようになる。冷静なやり方でね、ものを愛できるようになるんだ。根本は変わってない、変わってないんだけど、方法、方式が変わる。分かる？」

「...」

僕は十秒ほど黙っていた。そして、うなずいた。

「建てよう、墓を」

「そうこなくっちゃ。これはスッシーマンの墓でもあり、今までのお前自身の墓でもある。今までと同じようにスッシーマンを愛していい。ただ、もっと冷静沈着になろう。ごっこはもうしない。約束できるか？」

「する」

「よし、河原へ行こう」

僕の家近くには、川の中流部があって、とても辺りの見晴らしがいい。僕等は、日が沈みかけていたので、急いでその河原へ向かった。

「よし、ここら辺でいいな。翔ちゃん。はい、ペン」

卓也は、ポケットから黒のマーカーペンを取り出した。

「この板に、『スッシーマン之墓』なんて書け。濃く太く、はっきりとな」

卓也は、提げたかばんから先ほどの木の板を僕に差し出した。

「分かった」

僕はそれを受け取り、その上に、ゆっくりと丁寧に「スッシーマン之墓」と書きこんだ。手が、かすかに震えた。

「書いた」

「よし、待っとれ」

卓也は、板がすっぽり収まるくらいに、七つの石で河原の砂利の上に輪を作った。

「さあ、板を立てろ。これで、古い、ネガティブな自分とおさらばだ」

僕は、慎重に、輪の中央に板を立てた。ぐいと土の中に板を食いこませると、ほんの少し腕に汗がにじんだ。

とうとう僕は、スッシーマンの墓を完成させてしまったのだ。それを思うと、何だかよくわからない気分になった。

「よし。よくやった。よくやったぞ。お前は今、自分を脱皮させたんだ。どうだ、外に出てきて、すがすがしいだろ」

正直何か腑に落ちなかったが、僕は卓也に微笑みかけておいた。

「よし。それじゃ、スッシーマンが成仏できるように、拝んであげよう」

卓也は、小さな墓の前に座り込むと、目をつむり、手を合わせた。僕もそれに倣った。

時間の流れが止まってしまったようだ。目をつむっていると、そんな変な浮遊感があった。そしてその後、急に、速い流れの中に自分が飲み込まれたような感覚に襲われた。行く川の流れは絶えずして、しかも元の水にあらず。二度と元の場所へ戻っては来れない流れの中に巻き込まれてしまったのだ。どんどん流されてゆく。不思議なことに、恐怖は感じない。むしろ、それを歓迎するような気持ちが僕の中にはあった。何故だろう。分からない。

ぴたっ、と、その流れが止まった。ゆっくりと、目を開けてみた。

「主人」が、いた。